

令和5年度（2023年度）第1回北海道幼児教育推進協議会議事録

日時：令和5年（2023年）11月1日（水）15時30分～17時00分

場所：Web会議システム Zoom

議題 1 説明

- ・北海道幼児教育推進センターの取組について
- ・その他報告事項について

2 意見交換

論点1 幼児教育施設と小学校等との連携・接続について

論点2 保育者の資質向上について

論点3 目指す幼児の姿の実現に向けて

議事

議題1 ・北海道幼児教育推進センターの取組について

- ・その他報告事項について

- 1 事務局から資料に基づき、現在の取組状況等を説明
- 2 質疑応答、意見等はなし

議題2 論点1 幼児教育施設と小学校等との連携・接続について

（委員）

・論点1の幼児教育施設と小学校等との連携・接続についてですが、札幌市では幼保小連携協議会とあって、10年以上前からその繋がりがあり、明らかに今、その効果は入学してくる1年生の育ちを見ていると現れていると思っています。

このように、札幌市全体で取り組んできているので、10区に全部この連絡協議会があって、少なくとも年3回は大きな研修会があり、引継ぎは必ず行われるということで取り組んでいます。

学校には働き方改革の波が押し寄せていて、時間との戦いです。研修時間を設定することがなかなか難しい現状の中で、オンデマンド配信だとか多くの遠隔地を結んでの研修は、非常に効果的な取組であると思いますが、やはり顔を合わせた引き継ぎや研修がすごく効果があると思っています。本当はその研修会も、小学校で言えば、低学年の担任が参加するのが一番望ましいのですが、現状では小学校側からは校長や実務担当者の参加などで、担任が参加する時間の確保ができていないことが課題と感じております。

あとは、私立と市立との温度差をどう埋めていくことが大きなところで、えりも町のように町全体で進んでいく取組が一番大事であると思っています。

先ほどもお話がありました北海道版として、このモデルを全道各地に広げていくとのことですが、それぞれ地域によって状況が異なると思います。1つの小学校に対して1園であったり、複数であったり、保育園・幼稚園が混じっていたり幼稚園だけであったり、そのケースケースによって連携の仕方が変わってくると思うので、モデルを活用して、それぞれのところでしっかりと中心となるところが、管理職から意識を高めていくこと、温度差を埋めていく取組が必要であると考えております。

（委員）

・札幌には幼児教育センターが設置してありまして、定期的に大体3か月に1回、年に4、5回は地域の小学校、それから保育園、幼稚園の園長たちで集まり、また、主任クラスで集まりということで接続という意味では、近隣の幼稚園から小学校、保育園から小学校に行くという部分でかなり連携は深まっているのが現状です。

それから、近隣の小学校から幼稚園や保育園の先生に1、2年生の授業を見に来てもらいたいなど、年長から1、2年生に上がる、小学校に上がる接続という意味でもかなり充実しているのですが、なかなか、お互い仕事の合間を縫って、実際にしっかりと話し合いを深めていくことには、まだ、課題があると少し感じておりました。

また、今は気になる子が増えてきております。小学校に上がる際に引き継ぎはしっかり行っているのですが、小学校の方にもかなり配慮していただきながら、お子さんを見てくれているということで、札幌の場合はかなり充実してるのかなと感じておりました。

(委員)

・障がいのある子どもたちということで狭い範囲の話になってしまうかもしれませんが、お話をしたいと思います。

まず、幼児教育施設と特別支援学校の小学部との接続ということでは、盲学校、聾学校と肢体不自由の特別支援学校は幼稚部を設置しておりますので、自校内で幼稚部から小学部という就学・接続が可能になっています。そのような場合は、かなり早い段階からお互いに子どもたちの様子を見合ったり、小学部入学後も幼稚部の先生とフォローアップの情報交換をして、接続が比較的スムーズに行われていると思っています。幼児と小学生がともに学ぶことが可能な施設、校舎になっておりますので、早い段階から、ともに学ぶ経験や機会を多くし、内容を厚くして、幼児の小学校教育へのスムーズな移行ができればいいなと個人的にはそうありたいなと願っています。

それから、知的障がいの特別支援学校には幼稚部がありませんので、地域の幼児教育施設や療育機関から小学部に入学してくる子どもたちが大半になります。この場合、特別支援学校全てに関わるのですが、特別支援学校では広範囲の通学区域が定められておりますので、複数の市町村の幼児教育施設などの子どもたちが入学してくるということになります。こちらも、入学するに当たっては、市町村教育委員会の就学に関する教育支援委員会との関係がありますので、通常の幼稚園等から小学校に入学する状況とは少し変わってくるように思います。保護者の強い願い、安心安全でわかる学習を子どもたちに学んでもらいたいという願いもあって、本来は小学校特別支援学級相当であっても、市町村教育委員会との話し合いの中で、特別支援学校に入学するというケースもあります。このようなことから、知的障がいの特別支援学校におけるスムーズな接続という部分では非常に幅広くなっていて、ケースバイケースというような状況になっています。

特別支援学校では教育相談を担当している特別支援教育コーディネーターが中心となって、早期から幼児教育施設の要請に応じて、訪問支援を行って、そこで保育士、保育関係者の皆さんと情報交換を行って、保護者とも教育相談を行いながら、特別支援学校への円滑な接続を行っているところです。さらに就学が決まった後、特に2月、3月頃に、再び幼児教育施設へ学校の先生方が訪問し、引継ぎといいますか、個別の教育支援計画等に基づいて配慮すべきこと、それから教育内容を見せるための情報収集やケース会議も行って、4月からの小学部1年生の円滑な学びに結び付けているような状況です。

(委員)

・小学校と中学校の連携が進んでくるとは、区域内での一貫教育で目にするのですが、幼稚園と小学校との連携に関しては、あまり進んでくようには感じていなかった部分ではあります。なぜかという、この前、とある会議で幼稚園の先生で小学校のPTAの役員をされている方がいて、もう少し小学校の先生たちと幼稚園の先生たちが話し合う機会が多くあった方がいいのではないかという話をされていました。幼稚園と保育園はいろんな保育や教育の形があり、それぞれの特徴がすごくあると思うのです。幼稚園では、英語を教えてくれるところがあったり、どろんこ遊びが中心というところがあったり、それぞれの役割があって、親もこう育ててほしいなと思うところに預けることが多いと思うのです。その中で滑らかな接続という言い方をされていると思うのですが、どのようなものが正解であるのか、少しわかりにくい、幼稚園の方にも負担になる事があるのではないかと、少し心配になる部分もあります。

しかし、幼稚園や保育園を卒園した後、小学校1年生になるまでにはこれぐらいのことは身に付けましょうという共通認識をしっかりと定めた上で、いろんなプロセスを持って、そこにたどり着けるような理想像などを小学校と共通認識として、子どもたちにとって、自分で個別最適な学び、自ら主体的に学びを楽しめるような子どもを育てていくことがすごく大事になってくると思いますので、何かの数値的なもので表せない部分がすごく多い、形にすることが難しいかもしれませんが、理想的な子どもをどう育てるかということに、主眼を置いていただけたらありがたいという気はしています。

(委員)

・札幌では近所に幼稚園があって、小学校があって、幼稚園はバスに乗って遠いところに行く形でなければ、非常に近所にあるため、幼小連携について何か課題があるという認識は全く持たなかったです。数年前ではありますが、それぞれがしっかり連携する形が出来つつあるような状態であったからではないかと思っています。今、札幌がかなり進んでいる形ですが、全道的なことを考えると、なかなかそういったことにも遠隔地でそれぞれ幼稚園や小学校が遠い、物理的に遠いところが、根本的な原因、解消しない理由なのかなと思ったりしますので、私の勘違いでしたら大変申し訳ないのですが、行政の方でこのことについて、「しっかり近くの幼稚園に行きましょう」と義務教育で小学校へ行く場合は1番近所の小学校に行くわけですから、「幼稚園もぜひ徒歩圏内でいけるような、幼稚園に行ってみてはいかがでしょう」とそういうところから始めると、幼小連携・接続の問題というのがまず1つは解消されるのではないかと、思っているところです。

(委員)

・北海道版幼児教育スタートプログラム事業について、えりも町で取り組み出したことについてお話をしたいと思います。

まずは、きっかけなんですけど、昨今、幼児、青少年の育ちの中で、幼児期からの人格の形成の素地を幼児期から滑らかに小学校に繋げていくということが非常に大事な時代になっていると私は思っていました。えりもの子はえりもで育てる」ということをスローガンにして、当町ではこれまでも、高校については平成16年から連携型中高一貫教育をやっており、その後、小学校も含めて小中高の連携・接続ということで、学校教育においては取組を続けていたところでありました。昨年度、幼児期を含めて学びの連続性を重視した方がよいということで、私も考えておりましたが、きっかけとして本事業があったということです。

資料7でございますが、えりも型の子育てということで、なぜ、えりも型かということ、それぞれの地方で状況が違いますので、えりもは海岸・漁業の4,200人ぐらいの町なんですけど、その中でどのように子育てをしていくかということでありまして、三つの学校教育の推進事項等で、基本姿勢の二つを踏まえながら教育を位置付け、この表のようになっております。目標となる資質・能力については、学校教育で三つありますが、これを知徳体ということで分類しているということです。推進事項については、特に1の(4)で幼児教育を位置付け、幼小中高は15項目をえりも町の育てていかなければならない「未来えりも学」ということで位置付けて推進しておりますが、幼児教育についてもその下に書いてありますように資質・能力、これは文科省の方から示されていますが、10の育みたい資質・能力の基礎がありますので、それを知徳体に分類して、意識化を図ることから始めているということです。

本事業に関わっては、現在アプローチカリキュラム、要するに幼児期の後半の終末からスタートカリキュラムにより小学校1年生の入学時の見直しを行って、今、スタートプログラムにより幼児期の年長から小学校の1年生が終わるまでの期間にどのようにプログラムを作っていくかということを行っているところです。現状については、幼児教育施設への趣旨の説明、そして理解を得ながらということで、かなり時間を費やしたところです。2年目になって、やれることをやるということで理解が徐々に深まって、とりわけ保育所の皆様方にもご理解をいただきながら行っています。組織、会議等については、現在、三つの組織がありまして、大枠は大学の先生方などにも入っていただきまして、「幼小接続円滑化会議」が年2回あり、それを受けて保育所長や園長、学校長などで組織する「カリキュラム検討会議」で大枠を年3回協議する。そして、具体的な実践ということで保育士や幼稚園教諭、小学校教諭で話し合う「ワーキンググループ会議」を年6回実施しているところです。幸いにして、オンライン等で実施できる状況もありますので、内容が対面がふさわしいときは対面で、オンラインがふさわしいときはオンラインでやっております。また、保育士を十分経験した幼小接続アドバイザーを配置して、まずは、「えりもはえりもの形」ということで、幼小中高を繋げていくということであり、現行でいろいろ行っている取組をさらに充実させて、幼にも繋げていくということでもあります。それから、背伸びをすることなしに、学びの連続性ということで、0歳から18歳まで育ちを考えていくということをやっているところです。この事業を実施してから、一番大事なことだと私が思ったのは、意識の共有化をまずはきちんと図らなければならないことで、現在、2年目でいろいろとご意見をいただきながら進めているところです。

(委員)

・幼小接続ですが、私の園の実践と協会としての今後の取組の方向などを交えてお話をしたいと思います。架け橋プログラムが文科省で進んでいまして、北海道も実績を作っています。幼小接続というと、先ほど他の委員からもありましたが、幼稚園の育ちを小学校以降で受け取って、子ども達の育ちに繋げていく、その一つの鍵が10の姿だということですが、義務教育以降の姿を幼稚園児に当てはめてどういったことが、小学校入学まで望まれるのかという観点で幼小接続が事業として架け橋で行われている。その辺のところの誤解をどう解いていったらよいかということが、文科省で課題として挙がっていると聞いております。北海道では取り組んでくださっているところがあるということで、もし今後ご発表いただけるのでしたら、幼稚園の育ちをどう受け止めて小学校が変わったのか、あるいは、小学校以降の中学校、高校と教育が変わっていったのかという観点で事業完成の折にはご発表いただければと思います。

それから、当園は毎年、公開保育をしており、今年も実施しました。地元の小学校の先生には16人、今回はご参加をいただきました。公開保育は、よそ行きの日だけの保育を作ったのでは何も接続になりませんので、普段通りの子どもの姿を見ていただいて、子どもがどういった環境の中で日々、小さい積み重ねだけどういう育ちをしてるのかということ、子どもの主体、子どもの観点、子どもを見るという観点から話し合うという取り組みが大事だと思っています。協会としては、こういった公開保育の取組を全国に広げていって、小学校の先生が全国的にどこの認定こども園に行っても、公開保育を参観できる、あるいは学び合える環境を作っていけないかということで検討しているところです。

2点目は学校DXについてです。文科省中心に学校DXというものが進んでおり、幼稚園、保育所、認定こども園においても保育DXというものが進んでおりますが、ここの連携が全く取れておりません。全国的に取れていないので、北海道が取れているということは、なかなか言いにくいのかもかもしれませんが、これは保育士の負担軽減、あるいは先ほど小学校の先生からありましたが、小学校教員の負担軽減と結び付いていて、幼稚園でせっかく充実したものが、小学校に行ったら全くデータとして活用できないということになると、本末転倒の取組になってしまうことがあります。それから、小学生としてタブレットを活用するという前段階で保育のDXで、幼稚園や保育所の園児がタブレットを活用するということもあり、現在、取組も進んでおりますので、こういった観点からも、幼小接続は検討いただきたいということをお願いしたいと思います。

3点目ですが、特別支援を必要とするお子様の通所施設として児童発達支援事業所、あるいは児童発達支援センターというものがありますが、これが架け橋の中で少し漏れている部分がありまして、こういった形での支援が必要な集団の中で、インクルージョンの中で、どうやって育てていくかということであったり、むしろ机に40分座れる子どもを育てるよりは、その子ができる範囲でその自己肯定感を高めながら、子どもの育ちに関わっていった方がいいという話を小学校との関係の中でも、児童発達支援事業所では児童福祉の方でやっておりますので、未だに訓練と称して、40分座れないと子どもを叱りつけるそんな取組が行われていたり、いまいち幼小接続と言いながら一部漏れているものがあると思いますので、この辺についてもう少し児童発達支援センターや児童発達支援事業所も絡めた幼小接続を考えていただけると、全ての子どもにとってよりよい幼児教育、あるいは小学校以降との接続となるのではないかと考えております。

(委員)

・いろいろところで連携が進んでいることがよくわかりました。
幼保小連携に関しては、滑らかな接続だけではなくて、0から18歳、それを見据えた中で接続期、架け橋期という形になりますので、そういった広い視点から見ていくことが大事になると思うことと、各地域で頭を寄せ合って、自治体の方たちや幼小特支、中高の先生たちも含めてこの地域の子もたちをどのように育てていくかという話し合いをして、信頼関係を構築していくことが一番大事になるのかなと思っています。今、一生懸命えりもでも意識の共有化に時間を割いてるとお話がありましたが、信頼関係があるからこそ本音で語り合って、最終的には幼小を含めて単に交流ではなくて、カリキュラムのところまで目指していくため、大事な1歩、1年2年を現在、作り上げているのかなと思いました。

そして、私は札幌市在住ですが、えりも町の取組も少し見せていただきながら、非常に小さな町であるえりも町とこの広い札幌はすごく両極端な感じがして、札幌市が幼児教育センターを立ち上げなければならなかった背景には、その地域の幼稚園や保育園に必ずしも行ってないんです。保護者の働く場所であるとか、その方針を選んだところに行っている。だからこそ、センターを立ち上げて交流をしていかなければならなかった。大都市であるからこそその背景があったかなということもあり、そういう意味で小さい町だからできること、難しいこと、幼稚園の先生が小学校のことは語れない、小学校の先生で幼稚園のことを語れない、でも本当はその辺をお互いに見合っただけで疑問に思っただけで、こうなんじゃないですか、あなんじゃないですかと子どもたちがそこに関わっていくので、そういった子どもを中心にしながら私たちが語り合える関係が作られていくということが、0から18歳までのその町の子どもたちの育ちに影響していくのかなと思いました。

議題2 論点2 保育者の資質向上について

(委員)

・改めて道のオンデマンドの研修会や、現在実施されてる研修会を見せていただいたんですが、コロナ禍を通して、オンデマンドを使っているような研修を受けられる環境ができてると改めて思いました。ここは、本当に充実しているし、それを私達の方がうまく使わなければいけないなと思いました。

もう1つ思ったのは、どんなことをこれから行えばよいか考えてみたんですが、実践的なこと、何か実技をするという意味ではないのですが、例えば、積み木だとか、砂場だとか、そういう日常、子どもたちが使う教材の本当の意味や活用の仕方など、そういうことが実はあまりわかっていないかなと思いました。絵本や紙芝居もそうですけど、実は毎日使っているものなんですが、どのように使うのが大事なのか、それを使ってどんな力を子どもにつけたいのか、いろいろな大学があるので、一概には言えませんが、大学などの授業で扱うのが少なくなっているかなと思っています。絵本、積み木や砂場などは毎日毎日子どもたちが使うものなので、どういうものがあると子どもの能力を伸ばせるか、日々の遊びに没頭できるか、新しい発見があるなど、そういうことを実施してもらいたいかなと思いました。それから中堅の先生たちに関しては、実践的なことももちろんですが、うちの幼稚園も公開保育を毎年やってるんですが、やはり対面で話し合いができるということの喜びとかよさを皆さんすごく感じているので、中堅の先生はいろいろ経験を積んだからこそ、思ったこと、考えたこと、疑問に思ったことがあると思うので、そういう事を交流できる場が初任者だけではなくて、中堅にも必要ではないかと思いました。そういう情報交換をする場があるとよいかと、それから幼小の連携でもご発言があったようにお互いに実際、行ってみるによりかなり解決できることがあると思います。幼稚園もそうで、実際に他の施設を見学する、公開保育の場などではなくても、少し見学させてもらうとか、そういう機会を僕らも現場の管理職の立場としても、先生たちに作らせてあげる。道としても推奨するとか、そういうことも大事かなということをおもいました。

(委員)

・北海道幼児教育振興基本方針の中で保育者の研修については、様々な課題と目指す方向性というのが述べられています。センターが実施する研修ということについては、42ページの中ほどに参加者の人数の資料が載っておりました。令和元年と令和3年の比較ということになっていますが、これを見ますと参加者が倍増しております。この理由を考える必要があると思うんですが、おそらくコロナの時期も挟んでいましたので、令和元年は対面研修で、3年はオンラインだったのかもしれませんが、センターの研修内容の質の高さが認知されてきたということもあるかもしれません。引き続き、令和4年の結果も見たいところですが、この資料の限りで受講者が倍になっているということは、受講者のニーズとマッチしていて、方向性、大きな枠組みとしては間違っていないのではないかと思います。北海道は地理的特性がありますし、移動の距離、当園は北見市にあるのですが、札幌で開催となると5時間ぐらいかかるんです。そういったことも考えますと、今後も受講者にとっては短い時間でも実施できるようなオンラインとかオンデマンドの利便性はとても高いということがわかると思います。

次に園内研修についてですが、ここで申し上げたいことは施設にとっても、保育所にとっても、講師を招いた助言体制のある園内研修はなかなか大きな仕事だということです。

公開保育に慣れている園や誰が来ても対応できるような園はよいですが、実施するには準備とか、シフトの調整は負担が大きいです。施設によっては、保護者、利用者に自宅保育のお願いをしてやっているところも見受けられます。質の高い研修、園内研修が必要だということは、本当によくわかるのですが、十分実施できてない園というのも割とあるようですので、もっと負担軽減のための提案、アイデアを周知していく必要があるのかなと思いました。例えば、うちの園での講師についてですが、近くの学校の校長先生に来ていただいて、小1プロブレムなどの話をさせていただきました。あとは、消防署の救命救急士の方に来ていただいて救急の講習を短い時間、1時間の園内研修を実施しました。また、これをきっかけに、その小学校との交流が生まれまして、来月、年長児が小学校に行って、体験をする予定となっております。しかし、幼児教育理解や保育実践になると、さらに専門的に知見が必要だと思っています。そのような場合にセンターが実施している幼児教育相談員の派遣制度や園内研修リーダーの育成などを、もっと普及に努めた方がいいと思っています。本当はこうした質の向上に取り組む幼児教育施設に何かもう少しインセンティブがつけばいいなと思っています。例えば、北海道独自の加算であったり、認証であったり、そういったものがあると、より利用が促進されるのではないかなと思います。この目標指数が先ほどありましたように40%から80%を目指していますので、本当に取り組むのでしたらこういった施策も一考していただけたらと思います。

(委員)

・先週、私が所属する団体と私が主催する団体、1週間の中で2つ研修会がありまして、参加者は若干、少なかったのですが、参加した皆さんは、やはり顔を合わせて話すのが一番いいよねと感想を述べられておりました。各委員のお話のとおり、3年間のコロナ禍の中で顔を合わす機会がなかったということで、対面での研修に飢えている方が相当いることを実感しました。ただ、広い北海道の中で、研修機会を十分確保する意味ではセンターが主催していますオンデマンドのようなインターネットを使つての研修会というのが大変有効なんだと実際に感じております。遠隔であることに加えて、保育園の今年度の入所状況を見ても、実は定員を充足していないんですが、今年度、待機児童を北海道では出しているのです。なぜ、待機児童が出るのかと言いますと、保育士確保が地方に行くほど、十分進んでいない。これは、幼稚園さんも同じ状況かと思うんです。ただ、保育園が辛いところは、職員が就業している時間の全てに子どもがいるんです。ですから、その時間を空けて研修に向かうことができない。そういう意味では、インターネットを使つてオンデマンドあるいはライブラリ化された研修を手のすいた時間に見ることができるのは、とても有効だと思います。北海道では、このリモートでの研修が既に必須のものになってきているという気がしますが、先ほど、研修を受けた方に何らかのインセンティブをという話がありましたが、その前にぜひ、各自治体でインターネット回線が十分機能するレベルに引き上げていただくことが、まず大事なかなと。私も地方の方とインターネットでいろいろやるとき、中断したり、回線が切れたりということもあります。リモートの研修は集中するのが難しく、一旦、音が聞こえなくなった、一旦、映像が止まってしまったとなると、集中が切れてしまう。対面の研修でも、集中し続けるのが結構難しいので、できることであれば、各自治体でインターネットが繋がればいいよねという時代はもう過ぎていきますので、何とか回線の確保だけは第一義的に進めていただくとありがたいという気がしております。既にリモートでの研修は必要不可欠なので、さらに充実していただきたい。先ほど他の委員からも出ましたが、公開保育は、保育園ではなかなか実施したくてもできないのです。したがって、公開保育などをライブラリで見れると、職員たちも学ぶべきものが増えると思っています。ぜひ、その回線の確保、容量の確保ということを何とか各自治体の方でご検討いただけないかと思っています。公立の施設が少し遅れるような気がします。

それから、今後、研修をしていく必要があるのか、まだ決まった話でもないのですが、今、子ども家庭庁で議論されている「こども誰でも通園制度」に対して、0～2歳児の未就園の子どもを今の議論の中では月10時間程度、通園して子どもの育ち、あるいはその子どもの心を育てていくということが検討されているように聞いております。保育園においても全ての園が一時預かりをやっているわけでもありませんので、日常的に関係性がない子どもや保護者が来ることに對して、

どのような着眼点と関係性を持つということは通常の保育と異なる点があるかと思しますので、今、北海道でもモデルが1か所かと思いますが、来年度また先行事業ということで何か所か増えるかもしれませんが、ぜひ、こども家庭庁の議論とあわせて、これは幼児教育推進センターの話なのかそれとも、保健福祉部の話なのか、ちょっと難しい区分けになると思いますが、このことについて検討いただければと思います。根底にあるのは、先ほど障がい者保育あるいは障がい児教育の話がありましたが、発達に課題をもつ子どもが増えてきていることを考えていかなければいけないと思うんです。先日、非認知分野でいろいろ講義されている講師ともお話ができたのですが、非認知能力を高める前提条件が子どもたちの自己信頼だとかが明確に培われているかどうかで、保護者への対応も必要になってくるのではないかと、このことを「こども誰でも通園制度」に対する対応の中で検討していただくことも必要かなと思います。

(委員)

・新しい提案を2つぐらいさせていただきたいと思います。

まずは、保育者の資質向上について、教育実習の研究会などを主催していただければありがたいです。その理由は2つあり、1つは教育実習を受けることによって、幼児教育を志さなくなる人を防ぎたいということ。2つ目は教育実習によって学んだこと、経験したことをもとに各学校等に帰りますが、教育実習の質による、帰ってから卒業までの学びの質が変わってくるがあります。いろいろ調べますと、教育実習について研究した実績はないということでもありますので、今こそ、求められている活動だと思います。二つ目ですが、子どもの姿を語る研修を主眼にしたものを増やしていただきたいということです。教育者の援助や助言をもとに研修をすると、どうしても駄目出的なものになって、研修をやりにくい、あるいは受けてもあまり元気が出ないという感想をいろいろなところから聞きます。子どもたちの姿ベースだと、保育者同士の非常に雰囲気今こそ、求められている活動だと思います。二つ目ですが、子どもの姿を語る研修を主眼にしたものを増やしていただきたいということです。教育者の援助や助言をもとに研修をすると、どうしても駄目出的なものになって、研修をやりにくい、あるいは受けてもあまり元気が出ないという感想をいろいろなところから聞きます。子どもたちの姿ベースだと、保育者同士の非常に雰囲気がよい研修会になると聞いておりますので、こういった研修を新たに取り入れるものとしてご検討いただければと思います。

議題2 論点3 目指す幼児の姿の実現に向けてについて

(委員)

・当園では、農家のご協力をいただき、田植えをしております。必ずもち米を田植えして、稲刈りをし、最後にそのもち米で餅つきをすることや、近くに海があるので、地引網体験といって、漁師さんと一緒に魚をとる行事を毎年行っております。自然に触れることも大事なことだと思います。泥に触れる、土に触れるなど、いろいろなことに触れることは大事なことだと思うのですが、漁師さんや農家の方々に日々の感謝の気持ちを持ってもらいたいという、子どもたちへの願いをもちながら、自然の教育をしている。

(委員)

・自然体験というのは、子どもが関わるに当たって懐の広い活動ですから、すごくよい目標だなと思っていました。北海道ならではということもありますが、四季が豊かで、雪も降りますし、冷たい思いもできますし、水一つとっても氷になったり雪になったりしますから、全国的に比べて、後の教科教育に繋げる科学的な体験をたくさんできる地域だと思っておりますので、ぜひこういった取組が全道で広がっていくのがよいと思います。

それから、体験活動の外に出ますと、子どもたちの興味・関心は保育者が望んだ、狙った興味・関心とは違うところに発散していきます。例えば、季節の花を見たくて外に出たのに、雲の形が面白すぎて、花を全然見ないで雲ばかり見ていることがあります。子どもたちの興味・関心をもとに教育・保育を進めていくということであつたら、こういう体験活動が、狙った一つのものだけを体験すればよいという狭いものではなくて、子どもたちがその体験活動の周辺にある

広い興味・関心の対象を、保育者が積極的に拾って、雲が面白いねとか、花じゃなくて虫がいたねとか、狙ったもの以外に広く、保育者が反応して、その子どもの興味・関心からさらに保育を広げることが相まって行われれば、北海道は素晴らしい教育の地帯になると思っておりますし、要領・指針では、そのことも含めて、子どもたちの興味・関心から、保育を作る、教育を作ると言われておりますので、ぜひ進めていただきたい。

(委員)

・大自然の中で保育、とても大事なことだと考えております。私の保育園のことを言って申し訳ないのですが、保育園を移転する前は、もっと町より離れたところにありました。40年前の話になりますが、門を一步出れば、そこは自然の中、散歩に連れて行くこと自体が自然に触れ合う機会です。少し頑張って散歩すれば、山の麓から中腹くらいまで行けて、秋には、いろんな木になるものを見たり採ったりすることができて、いわゆる自然の中での保育が実践されていたという現実があります。

ただ、現状、今の保育園は町の中に寄ったので、周りの道路は歩道の区別がないこと、交通量も多く、近くに適当な遊べるところもありませんので、昔のような大自然の中での保育ということとはなかなかできなくなりましたが、その中でも、食育の観点からも考えまして、プランターに苗を植えて、キュウリとかトマトとかを子どもたちに見せてあげる。それから調理の方に頼んで、食べさせるということもさせていただき、自然に親しむような意味も求めているということでもあります。

コロナ明けでようやく、この数年間自粛していた、例えば、リンゴ狩りに行くとか、山に子どもたちと一緒に登るとか、そういうことをようやく再開できるようになりましたので、少しずつですが、自然に親しむ保育を実践していくように、工夫していきたいと考えております。

その他

(委員)

・今の保育者として採用する先生方ですが、研修の一つに社会性を育てるというか、コミュニケーション力のない方が保育者となるケースがあるものですから、忍耐力、責任感など、社会性やコミュニケーション力を身に付けるような研修の機会がもう少しあればいいということ、提案させていただきたいと思っております。

(委員)

・今のことに関わって、基本方針の27ページの「目指す姿」で、目指す保育者の姿をもう少し明確にターゲットを絞り込んで、示すといいのかなと思います。各幼児教育施設では年齢構成や経験年数に応じた園内研修、園外研修へと促しはされているとは思いますが、やはり研修ターゲットを定めることがまず重要になってくると思いますので、その指針も示してあるとさらによいかと思いました。

(委員)

・皆さんのお話を聞いていましたら、このお話をさらに聞きたいとか、補足させていただきたいことが13個ありました。時間がありませんので、要点だけ、忘れてはいけないと思うことをお話しします。

第1はこの幼児教育推進センターがスタートしたときに私たちが願っていたことは何か、それは、北海道の小中高校の児童生徒の学力、体力、それらが全国で下位なんだ。そのような北海道の子どもたちを知徳体の面で豊かに育てていくためにはどうしたらいいのか、それは、やはり幼児期からの教育が大事なのではないだろうか、それにオール北海道で向き合っていくとうことで、幼児教育推進センターがスタートしました。そして、これまでいろいろな取組をしてきているわけです。今回、お話に出てきているオンデマンドのコンテンツについても、例えば、北海道私立幼稚園協会から幼児教育推進センターと重なる部分を除きながら、共有できる場所はないかというようなことも相談に来ているところです。

それからもう1つは、幼小接続のことですが、その中で見落としているところはなかったかということなんです。それは保育園、幼稚園、認定こども園から小学校に行く子どもたちが小学校の下校後、児童会館に行っている。この児童会館で生活しているところで楽しく豊かに安心して過ごせているのか、あるいは宿題などもできているのか、そういったところで児童会館にも私たちは心配りしなければいけないということ。それから、先ほど学校DXの話が出たのですが、この学校DXについては、働き方などいろいろあるのですが、私たちが見失っていけないことは、子ども第1という視点だと思います。もちろん働き方や作業効率のこともあります。育ちの記録みたいなものがきちっと幼小中と重ねられていくと思います。

それから、タブレットのことは課題です。非認知能力を育むことも継続的な課題です。さらに、発達障がい疑われる子の割合が増えていると言われていていることについて北海道における現状を確かめ、そのこととしっかり向き合わなければなりません。

それから、えりもの実践事例は古くから大切にされている人格の基本育て、幼児期からの知・徳・体の教育を意識した実践です。このえりもの5年後10年後の子どもたちが、全国学力・学習状況調査、新体力テストでどういう数字を示してくれるのかということが大事なことだと思います。現在のえりもの事例や実践されていることだけでは見れないことなんです。全国学力・学習状況調査、新体力テストとの関連を見ていただければと思います。そして、0歳から18歳を見通すという、これが本当に大事なところであることを改めて思ったところなんです。